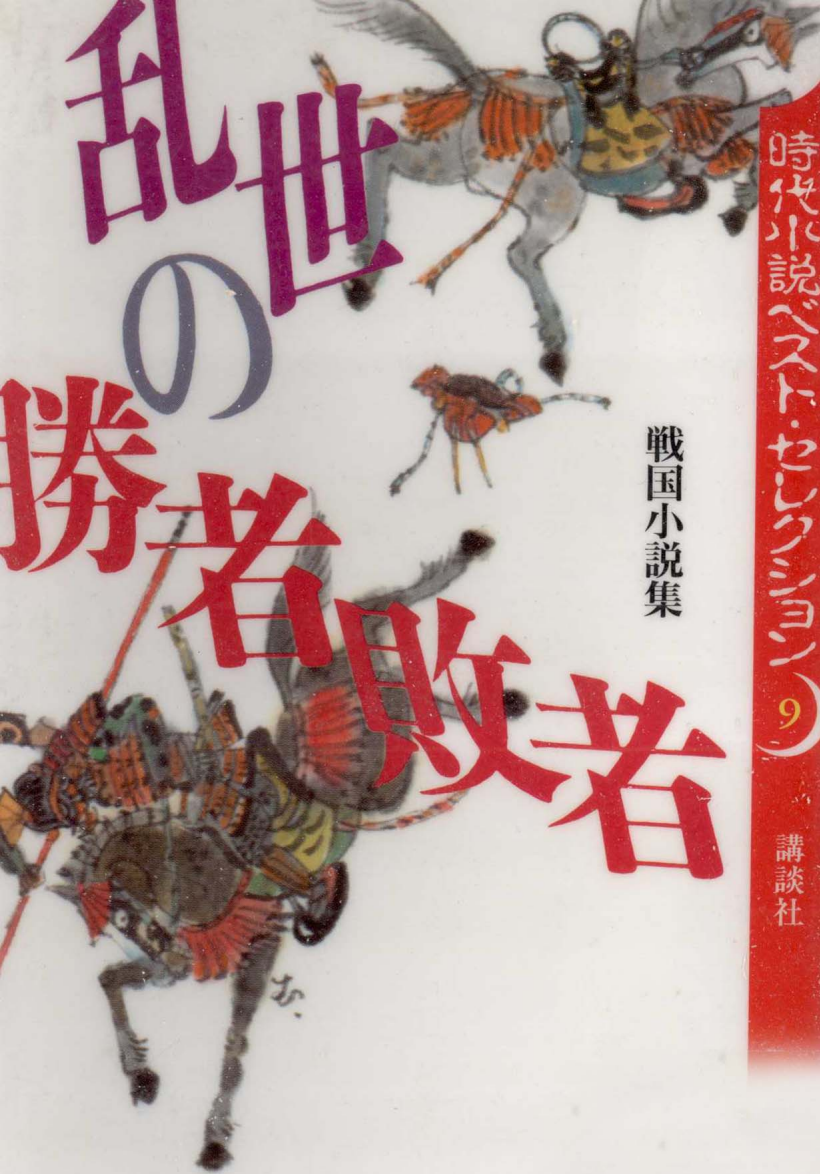




乱世の勝者敗者

戦国小説集

時代小説ベストセレクション 9

講談社

時代小説ベストセラーシリーズ

乱世の勝者敗者

時代小説ベスト・セレクション 第九卷

乱世の勝者敗者 戦国小説集

一九九四年一月二四日 第一刷発行

著者 今東光 他

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

郵便番号 一一二一〇一

東京都文京区音羽二一二二

電話 編集部 (〇三) 五三九五―三五〇五

販売部 (〇三) 五三九五―三六二二

製作部 (〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

定価はカバーに表示してあります。



落丁本・乱丁本は小社書籍製作部にてお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部にてお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

©Toko Kon and Others 1994.
Printed in Japan

ISBN4-06-254909-3 (文2)

乱世の勝者敗者◆目次

信長を刺した女

今 東 光
8

夢

南 條 範 夫
30

伊賀越え

新 田 次 郎
38

武田信玄

檀 一 雄
60

奥羽の二人

松 本 清 張
82

軍師二人

司 馬 遼 太 郎
108

雲と残月

尾崎士郎
138

生きていた光秀

山岡莊八
172

戦国を斬る

白石一郎
198

編者解説

縄田一男
226

装画 村上 豊
装丁 熊谷博人

乱世の勝者敗者

〔戦国小説集〕

今東光

信長を刺した女

夜そろそろ納戸なんどの寝部屋に入ろうとお園そのはふつと髪を撫なでつけた。

夫婦になつてから落ちついて閨ねやを共にしたことのない幾年月をかえりみると、大変な時世せいせいに生れ合せ、ひどいところへ嫁入つて来たと思わずにはいられなかつた。お園が源内げんないのところにかたづいて来た頃は石山いしやまの本願寺は証如上人しょうじょうにんが法主ほつすだつた。彼の時代に河内かわうちの報恩講の御齋衆いっさしゅうが非常な勢いで増大していった。河内八里と称せられる太平寺、八尾、竹井、蛇草、玉櫛たまぐし、榜示ぼうじ、横沼、サ

ントの門徒もんどうは悉く報恩講を結成した。御開山忌には河内三所さんしよと称せられた古市、西浦、誉田ほむたの門徒が参集した。

摂河泉せつかせんにも加賀や能登や越前などと同様、法主という坊主將軍を中心にして、坊主大名がこれ等の農民を掌握しやうあくしていた。国人こくじんという類たぐいの民衆は武士団にせよ百姓にせよ殆ど組織化されていたのだ。従つて天文元年、細川晴元が木沢長政きざわながまさを扶たすけて河内の畠山義宣と合戦した時には河内の門徒二万余人が一揆いっきを起して細川を援護した。この木沢長政という城主が証如上人の助けを得て三好元長を泉州堺に攻めた時は畿内の門徒衆は無慮二十万に近い大衆となつて合戦に従つた。その度に夫の源内も物の具をつけて馳せ参じた。その留守の間、家の中のことはもとより野良仕事まで独りでひつかまえてお園は働いた。合戦はおおむね短期

間で終った。一向一揆はまるで怒濤どとうのように田園から起ったかと思うと、また波の引くように引いて仕舞うのであった。すると源内は槍をかついで埃まみれほこりになって戻つて来た。

休む間もなく翌る日から源内は畑に出て行った。真黒に日焼けした源内は稀に笑うと白い齒がこぼれた。合戦の話は唯の一度もしたことはなかった。源内は家庭でだけは血なまぐさい戦争の話を選けたかった。

一つ一つ灯を消して行き寝部屋に行くと、夫の規則正しい軒いびきが聞えてきた。昔の百姓と違つて今どきの百姓は兵農だ。彼等の夢に描くものは信仰を中心とした領国制をうちたてたかったのだ。話に聞く越前のように貪慾どんよくな領主を討ち滅し坊主を中心とした本願寺領で安居樂業あんきやらくぎやまうしたかったのだ。その国からは戦争を一掃し、税を廉やすくし、妻子と

共に平和に暮したい。

お園は源内の脇にそろりと身体をすべらせて入って行くと、きゅつと抱きついた。すると源内が目覚めた。そうしてお園を痛いほど抱きしめ、

「久し振りよのう」

と溜息のように呟つぶやいた。まったく源内も若い、ぴちぴちした女房の肉体に触れるのは久し振りだった。彼女を貰った頃は夜になるのが毎晩楽しみで、早寝をしてはお園と閨房けいぼうにこもったものだ。

お園も次第に習熟しじくしてきて源内の愛撫あいぶに応こたえるすべを知つてきた。

「もう何にも欲しゅうない」

お園は囁言ささやを言つては千万無量の啼なき声こゑをあげるのであった。

そのうちに尾張から出て来た出来星の織田信長という武將が、逸早いちはやく都へ旗を立てると、たちま

ち大坂の石山城を明け渡せという難題を持ちかけてきた。その頃、全国の門徒へ発せられた檄文は河内へはいの一番に伝達されたのだ。

信長上洛に就いて此方迷惑せしめ候。去々年来難題を懸け申すにつき随分扱ひをなし、彼方に応じ候ふと雖もその詮なく、破却すべき由慥かに告げ来り候。さればこの時、開山の一流、退転なきやう各々身命をかへり見ず忠節をぬきんでらるべく候こと有り難く候。しかしながら馳走頼み入り候。若し無沙汰の輩は長く門徒たるべからず候也。あなかしこ。あなかしこ。

この檄文を受けると一番最初に一揆を催したのは河内門徒だった。元亀元年、九月六日の教書に接した河内門徒は、十月には摂津三牧を占領し、河内では遊佐や畠山の国持ち大名を攻撃するに及んだ。この時の合戦は信長と本願寺とは一旦、和

解に及んだが、それでも近江では美濃尾張の交通路を杜絶し、神崎郡建部郷、箕作山、あるいは観音寺山にたてこもった。その他、金森、草津、勢多、守山、勝部、浮気、高野、金勝、甲賀などに一揆は波及したのである。

源内等は直ちに組中からの召集によつて武器を執つて立つたが、早くも講和が成立したので戦争を中止して村へ帰つて来た。

「どこもお怪我は」

と駆けよるお園に、

「戦さもせぬのが何しに怪我しようぞ」

源内は高笑いして妻の心配を吹き飛ばしてしまつた。これを手はじめに信長の出陣の都度、彼はかり立てられた。

信長は河内の一揆の後、長島を攻め、越前、加賀、あるいは紀伊の雑賀と本願寺の手足を断ち切

りつつ次第に石山城を裸城にしていた。本願寺は憑^{たの}みに思う武田信玄に死なれ、更に上杉謙信の上洛を首を長くして待っている最中にその謙信にも死なれ、遂に抗し難くなつて証如上人は、

わざわざ啓達^{けいたつ}せしめ候。仍^{よつ}て信長公と和平の儀は旧冬^{いらい}已^い来、勅使をもつて度々仰せ出され候間、旨趣において条々言上せしめ候ひき。大坂退出の段に相究^{きはま}り候間、思案のごとく勅命に応じ候。その仔細、別紙に門徒中へ一翰^{いっかん}を染め候。披覽をとげられ当国坊主分並びに門徒の輩に一々間違はざるやう申し渡すこと肝要に候。開山尊像を守り申し去る十日、雜賀に至り下着候云々。

という切々たる書翰^{しよかん}を發している。天正の八年四月、証如上人は石山城を捨てて紀州鷲ノ森へ退散して行つた。

このことは河内門徒に大打撃を与えた。御齋衆

はおんおん泣きながらこの教団の末路を見送つた。しかしながら証如上人のお子さんの教如上人は、御父の敗北主義に賛成できなかった。若さの血のなせるわざであらうか。彼は直ちに河内門徒へ、

きつと筆を染め候。今度当寺、信長と無事あひととのをり、しかれば天下和談のすぢに候はば連々入魂^{じつこん}そろ。西国東国一味に調^{ととのへ}られ、猶^{なほ}そのうへにても当時あんのんに候てさぞ無事にてはあるべき事候、結句、当寺を彼方へ相渡し退出候はば、表裏は眼前候。左様に候ときは数代聖人の御座ところを彼のもの共の馬の蹄^{ひづめ}にけがしはてんことあまりにあまりに口惜しく歎き入候。雜賀衆寺内の輩も、数年の籠城かたかたくたびれ、すでに続きがたき事もちろんながら、なにとぞ今一たび可成ほど当寺あひ抱へ、聖人の御座所にて相果つ

べき覚悟にて候。然しかれば御門主に対し申自余の私曲をかまへ申す儀ゆめゆめ無之候。ただひとへに当寺退転なく、仏法相統候やうにと思ひ立ち候ばかりに候。各々同心候はば仏法再興ありがたかるべく候。老若ともにたのみ入り候。

このような激越な教書を発した。それに対して父の証如上人は「いたずら者のいいなし」に同心協力しないようにと屢々しばしば、教書を下したのであった。

河内門徒等は本願寺のために数多あまたの血を流して来ただけに如何なる理由があるにせよ、むぎむぎと怨敵おんてき信長に蓮如上人このかた数代の石山城を明け渡すということに憤懣ふんまんやるかたなかったところへ、教如上人の教書に接し、飽くまで信長に敵対する決心をしたのだ。

源内はその日もはるばると久宝寺御坊の末寺に

なっている中野の道場へ馳せ参じた。同行がびつしり廊下まで溢れ、吐く息は激越な感情を押し殺して白い烟けりとなっている。魚油の燈台を真中にして長老格の禿げ頭が、しわがれ声で教如上人の教書を読みあげてから、さて咳せき払いをして言った。

「御父子の御意見が斯様かようになったのも是非がない。仏敵の出現によつては御父の骸むくろを越えても戦わねばなるまい」

源内にはしかながら証如上人と教如上人の意見の相違は果して本心かどうか疑わしく感じられた。往々にして父子兄弟、敵となり味方となつて分れ分れになつて戦うのは保元、平治このかた武家の慣なりわしではないか。してみると証如上人は勅命をかしこみ奉つて表面は開城と見せかけ、実は教如上人をして反信長党を蜂起ほうきせしめ、あわよく

ば真宗教団の危機を切り抜けようとせられているのかもしれない。とすれば当然、教如上人の勸説かんぜいを容ゆるれて、この際は矢張り一揆を催して合戦すべきではあるまいか。そうしてこそ真宗領国が建設されるのだ。手をこまぬいては信長に攻め立てられ、果ては根絶やしにされて仕舞うだろう。

「われら、おとなどもはよりより相談したが一決せぬ。それと申すも御父子の仲、御意見の相違は結局、河内門徒を分裂させる結果になろうやもはかられぬ。そこで今夜、御同行に寄つてもろて攻むるも可、守るも可、それとも退転も可を決めたいのじゃ。各自の意見を聞かさっしやい」

誰も何とも言わない。

「織田公のおわす限り戦わずばなりますまい」

「おう。源内どんか。よう言うてくれた。これに異存ないか」

「なし」

「河内門徒は今日のような結果のために命を投げだしはせぬ筈じゃ。御同行も知つての通り既に文明年中、一向一揆は加賀ノ国の守護職とがしまさらか富樫政親殿を攻め亡ぼして加賀一国を支配した。それより以来、百年にわたって北越は門徒の領国となつていたのじゃ。かたじけなくも蓮如上人は山科やましなから津ノ国生玉庄小いくたまのしょうこ（大）坂さかの石山に御城をもうけさせ給うてから津ノ国にあつては富田とんだ、平野郷。堺にあつては北ノ庄。当国においては萱振かやふり、久宝寺じ、部屋しとみや、出口、守口、古橋、枚方ひらかたなどに道場をかまえ、所在に門徒をひろめさせられた。都に近い当国は真宗領国として恰好のところ、この時に当つて大坂御退転とはまさに真宗破滅の時いたつたかと思われる次第じゃ。やわかこのままにすまそうや。御同行は心を一つにして御法主の御た

め、否、河内門徒のため身命をなげうつて御働き
ありたい」

聞きいる同行の中には涙を流しているのが多か
った。数年にわたる足利末期の合戦のため、どれ
ほど河内国は疲弊したかしれない。合戦といえ
ば百姓は兵として召し取られた。畠山氏、細川氏、
三好氏と同族が争うたびに河内の百姓はそのど
ちらかに徴発されてはむぎむぎと殺されていった。
あるに甲斐ない命と諦めている時に彼等は御門徒
に加えられ、はじめて生きる望みを抱くことが出
来たのだ。戦争を絶滅するためには寄合ひ、談合
をしているうちに、門徒が力を合せて武士階級を
なくすることだと気がついた。そのうちに在郷の
武士等が集団で加わってきた。彼等もまた現世出
世を諦めた郷士達だ。それならば教団のために働
く方が意味があると悟ったのだ。

彼等にとつては最早や法主も教団さえどうでも
よかった。この同行の結集で河内一國だけでも自
分達の手で掌握しなければならぬと覚悟したの
だ。守護や地頭は自分達で勝手に争つてはその権
力を奪ひ合つた。それだけではない。血で血を洗
つた結果は百姓に高い税をかけてきた。彼等は汗
して働いたものを奪われ、揚句の果てには命まで
召しあげられるのだ。

源内は可愛い若い妻のお園には合戦の話を開か
さなかつた。けれども明け暮れの合戦にどんなに
彼女が案じているかは顔色を見るまでもなくわか
つた。

信長が天王寺村まで進出して石山城を攻めつけ
た時、紀州雜賀の門徒衆はおびただしい鉄砲で防
いだ。当時、本願寺軍には二三千挺の鉄砲の備え
があるといつて日本全国に鳴りひびいたのは実は